

# 横山C遺跡 発掘調査報告書

1991

山形県  
山形県教育委員会

よこ やま  
横山 C 遺跡  
発掘調査報告書

平成 3 年 3 月

山形県  
山形県教育委員会

## 序

本書は、平成2年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した横山C遺跡の調査成果をまとめたものです。

横山C遺跡は山形県の南東部に位置する米沢市にあります。米沢市は南方に吾妻山脈が連なり、山脈から流れでた最上川の源流の松川や天王川をはじめとする大小の河川が北流し、扇状地や自然堤防が形成され、城下町米沢が発達しております。

調査では、平安時代中頃の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの遺構、土師器や須恵器などが出土し、ほかに縄文時代の土器片も発見されています。このことは、原始から古代にかけて断続的に人々が住みはじめた集落跡の一端がうかがい知ることができます。

遺跡は一度壊してしまえば二度とは元に戻らないものです。埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産といえます。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し、子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りをすすめるために、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存あります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査に御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成3年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

## 例　　言

- 1 本書は山形県土木部の委託を受けて、山形県教育委員会が平成2年度に実施した米沢ヘリポート整備事業に伴う「横山C遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は平成2年9月17日～同年10月31日まで、延べ31日間にわたって実施した。
- 3 遺跡の所在地は山形県米沢市大字竹井字横山2531番地外に所在する。
- 4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担任 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長捕佐 佐々木洋治

調査班長 佐藤 正俊

主任調査員 月山 隆弘

調査員 真壁 建

事務局 事務局長 土門 紹穂

事務局長捕佐 斎藤 久子

経理班長 佐藤 庄一・野尻 侃

主任事務員 新聞 紘子・賣間 秀男・永井 健郎・渋江 正義

- 5 発掘調査にあたっては米沢市教育委員会、米沢市企画課、米沢森林組合、山形県空港高速道路建設課、米沢建設事務所、東南置賜教育事務所など関係機関のご協力を得た。

- 6 本書の作成は佐藤正俊・月山隆弘が担当した。遺構図・遺物の実測などは月山が担当し、本文の執筆は両名の協議のうえ、I・III章を佐藤、II・IV・Vを月山が分担した。編集は月山隆弘・安部 実が担当し、全体の総括を佐々木洋治が行った。

- 7 現地調査・報告書作成の過程で、つぎの方々から種々のご指導と助言を賜った。記して感謝申し上げる。

加藤 稔・阿子島 功・尾形與典・手塚 孝・菊池政信 (順不同 敬称略)

- 8 調査記録および出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

## 凡　例

- 1 本書で使用した遺構記号は次の通りである。ST：住居跡、SB：建物跡、SK：土坑、SD：溝状遺構、EB：柱穴、SX：不明遺構
- 2 遺構番号は基本的に現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲している。
- 3 遺物に付した記号は、RP(土器)・RQ(石製品)であり、遺構内での検出順にしたがって番号を付した。
- 4 報告書作成・執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1)遺構分布図、同平面図中の方位は磁北を示している。なお、グリッドの南北「Y」軸は磁北よりN-26°-Eに傾いている。
  - (2)遺構実測図では1/20、1/40、1/50、他の縮図で採録し、各々にスケールを付した。
  - (3)遺物実測図・拓影図は原則的に1/2、1/3、1/4で採録し、各々にスケールを付した。
  - (4)遺物観察表中の計測値欄で、( )内数値は図上復元による推計値ないし残存値を示している。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I～VI」等は、遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。
  - (5)遺物図版は、原則的に壺類が1/3、甕・鍋類が1/6に表した。
  - (6)土器実測図・拓影図の断面は、白ヌキが土師器、網点が赤焼土器、黒ベタが須恵器を表している。また土師器で内黒のものは内面に網点を入れた。
  - (7)遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版各々共通とした。

## 目　次

I 調査の経緯	2 土坑.....	16	
1 調査に至る経過.....	1	3 溝跡.....	16
2 調査の方法と経過.....	1	4 不明遺構.....	16
II 遺跡の概観	IV 出土遺物		
1 遺跡の立地.....	3 繩文時代.....	18	
2 歴史的環境.....	2 平安時代.....	18	
3 遺跡の層序.....	V まとめ.....	22	
4 遺構と遺物の分布.....			
III 検出遺構			
1 建物跡.....	8		

## 挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第9図 4号住居跡	13
第2図 遺跡全体図	4	第10図 5号掘立柱跡	15
第3図 土層柱状図	5	第11図 8号土坑・10号溝跡他	17
第4図 調査区土層断面図	6	第12図 出土土器(1)	19
第5図 遺構分布図	7	第13図 出土土器(2)	20
第6図 1・2号住居跡(EL 6 炉跡)	9	第14図 出土土器(3)	21
第7図 3号住居跡	11		
第8図 7号カマド跡	12		

## 表

遺物観察表	21
-------	----

## 図 版

図版1 遺跡遠景・遺跡近景	図版12 出土土器(2)
図版2 遺跡近景・遺構検出状況	図版13 出土土器(3)
図版3 遺構検出状況・遺構群完掘状況	図版14 調査風景他
図版4 ST 1・2 堅穴住居跡	
図版5 EL 6 炉跡・RP 1・RP 2・3・6 遺物出土状況	
図版6 ST 3 堅穴住居跡・完掘状況	
図版7 ST 3 堅穴住居跡・EL 7 カマド検 出状況・完掘状況・RP 4・5 遺物 出土状況・土層断面	
図版8 ST 4 堅穴住居跡・完掘状況	
図版9 SB 5 掘立柱建物跡	
図版10 ST 1～4 住居跡・SB 5 建物跡・完 掘状況・SK 8・SX 9・SD10・ 51～54—50・51G 土層断面	
図版11 出土土器(1)	

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

米沢市には横山C遺跡をはじめ200ヶ所余りの遺跡が昭和63年度段階で確認されており、県内市町村の中でも埋蔵文化財包蔵地の多い市でもあり、近年は中世城館跡調査や縄文時代前期の大型住居跡が検出された一ノ坂遺跡、奈良から平安時代の置賜郡衙の推定地とされる大浦遺跡など県内を代表する遺跡の発掘調査が進められ、原始から古代・中世と置賜地方全体の歴史が解明されつつある。その一つである本遺跡は、米沢市教育委員会で実施した遺跡詳細分布調査により、昭和60年度に縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡として、遺跡地名表等に登録された。

平成2年度に本遺跡に県米沢ヘリポート整備事業が係るため、山形県教育委員会では遺跡保護の観点から、事業の主体者である山形県土木部や米沢市企画課、市教育委員会との協議を行い、平成元年10月と11月に再度の分布試掘調査を実施した。その結果、地表下約60cmの地点から平安時代の良好な遺物包含層を確認することができた。そこで事業側と保存協議を重ね遺跡の中心部から約100m南側に移動して事業を進めることになり、遺跡の南端について山形教育委員会が主体となり緊急発掘調査を行ったものである。

### 2 調査の方法と経過

調査期間は、委託期間が平成2年9月1日から平成3年3月31日、現地調査は平成2年9月17日から10月31日まで31日間に亘って実施し、その後室内において遺物整理や報告書作成の業務を行った。なお、現地説明会は10月31日関係機関の協力を得て実施した。

調査は、遺跡の南端の事業区域に限定し、分布試掘調査の結果に基づいて行った。グリッドはヘリポート・スポット中心点を基点に、東西軸線をX軸、南北軸線をY軸とし座標と決め、5m×5mを1単位とするグリッドを設定し、Y軸方向がN-26°-Wを計り、幅2.5mのトレンチ掘を併用し行った。調査の面積は、トレンチ掘区を合わせて1,125m<sup>2</sup>である。

調査の経過は、作業状況からみて四段階に分けられ、概要すると次のとおりである。

第一段階 9月17日～28日(9日)器材搬入。調査区設定後坪掘作業。重機械による表土剥。

第二段階 10月1日～12日(9日)重機械と併行し簡単な面整理後、拡張区のグリッド設定、面整理や土層観察により遺構の確認や遺物の分布状況を把握。

第三段階 10月15日～26日(10日)確認した住居跡・土坑等の精査検出。記録作業や写真撮影。一部遺構平面図実測作業。さらに遺跡南端のトレンチ掘で確認作業。

第四段階 10月29日～31日(3日)平面実測・写真撮影。器材撤収準備、31日器材搬出。



第1図 遺跡位置図 ( $S = 1 : 25,000$ )

遺跡名	時期	種別	遺跡名	時期	種別
1 横山 c	平安	集落跡	9 比立尼平	縄文・奈良～中世	集落跡
2 早坂山 a	縄文・中世	集落・城館跡	10 二夕保 b	縄文	集落跡
3 早坂山 b	縄文・中世	集落・城館跡	11 大清水	縄文・古墳	集落跡
4 早坂山 c	縄文	集落跡	12 水神前	縄文	集落跡
5 早坂山 d	縄文	集落跡	13 八幡堂	縄文・古墳	集落跡
6 台坂	縄文	集落跡	14 竹井境 a	縄文・奈良～平安	集落跡
7 下花沢 b	縄文	集落跡	15 沼田土壙	中世	塚
8 通町	縄文	集落跡	16 下原田城館跡	中世	城館跡

## II 遺跡の概観

### 1 遺跡の立地

横山C遺跡は、山形県の南東部に位置する米沢市にあり、市街地の東部八幡原工業団地の一画、米沢市大字竹井字横山2531外に所在する。

米沢市は、南方に吾妻山脈が連なり、山脈から流れでた、最上川の源流の松川・鬼面川・羽黒川をはじめとする大小の河川が盆地の中央で合流し、扇状地や自然堤防を形成している。

気候は内陸的な特徴を示しており、夏は高温多湿である。冬は日本海から吹き込む北西風によって、米沢盆地では雪が多く低温で、1~2月には150cm前後の積雪になる。

当遺跡のある、八幡原は、市街地東部を流れる梓川・羽黒川の流域にあり、東・南部及び北東部を奥羽山脈の山麓部に囲まれた南北1.5km、東西2kmほどの範囲にある。

調査区は八幡原工業団地の北東に隣接しており、天王川右岸段丘上に立地し、北と東側で丘陵によって限られている。現況はナラ等の雜木林になっている。標高258~259mを測り、遺跡範囲は、東西150m・南北250mほどに及ぶ。

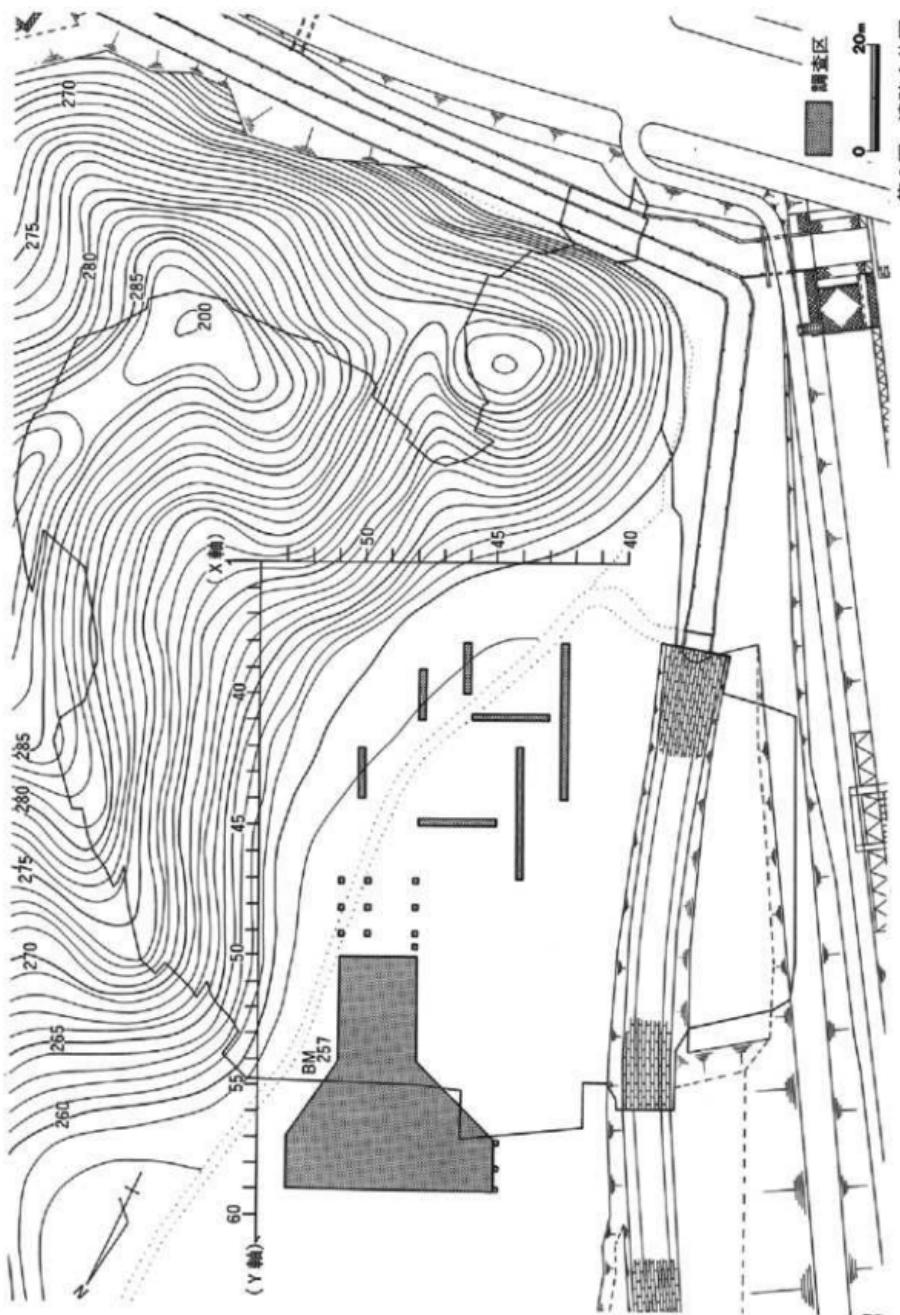
### 2 歴史的環境

米沢市には、横山C遺跡を含め現在までに約200箇所(山形県遺跡地図)の遺跡が確認されており、県内では遺跡数が最も多い町でもある。旧石器時代から中世・近世におよぶ長い時代に亘る。

山形県の古墳文化は、内陸地方を中心に発達したと考えられている。米沢市には、戸塚山古墳群・寶領塚古墳・木和田古墳など、5~6世紀代の古墳が存在している。これらは農耕社会の生産力を物語っている。また、笹原遺跡や近年調査されている大浦遺跡などからは木簡・漆紙文書なども出土して考古学的に注目されている。

横山C遺跡の周辺は、米沢市の中でも八幡原遺跡群として数多くの遺跡が密集している地域である。八幡原の中心地域は戦時に八幡原飛行場として整備され、戦後には一時競技場となった所でもある。八幡原工業団地造成に先立って米沢市教育委員会によって昭和49年から10年余に亘って発掘調査が進められ、上竹井・堂森・比尼平遺跡など、置賜地方における縄文時代や弥生時代さらには古墳時代から平安時代にかけての、遺跡の性格と背景にある文化・地域圏を考える上で貴重な資料を提供している。さらに近年は、中世城館跡調査によって市南部から西部丘陵沿の山城が発見され、米沢地域の中世の歴史も明らかになりつつある。

第2図 遺跡全体図

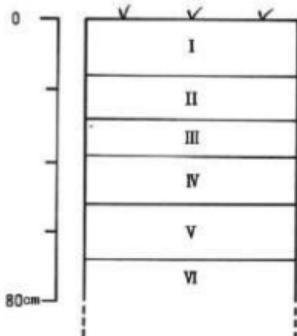


### 3 遺跡の層序

遺跡範囲は天王川の右岸段丘上に位置し、段丘縁にあたる。

層序は、調査区東・南壁の観察により、I～VI層に分けられる。ただし、北壁においては削平を受けていたためにII・III層は確認できない。

I層：茶褐色シルト（表土）、II層：黒褐色シルト、III層：暗褐色シルト、IV層：黒褐色シルト（細砂・炭化粒を含む、しまりがない）、V層：黄褐色シルト（炭化粒を含む、しまりがある）、VI層：明黄褐色砂細質土である。



第3図 土層柱状図

調査区南のトレンチ観察により、VI層から下層は50～100cmの黒色シルト・黒色粘質土になつてゐる。また、その下には礫層があり、調査区のすぐ西側を流れる天王川は、調査区東側の丘陵直下まで入り込み調査区内を蛇行していたものと推定される。

遺構の確認(ST 1・2)はVI層上面、遺物包含層は、III層下部及びIV層上面である。

### 4 遺構と遺物の分布

遺構の分布は、調査区北西(45～50—55～59G)に密集して検出している。住居跡(ST 1～4)、建物跡(SB 5)は45～50—56～59G、調査区の最北端に確認している。ST 1と2は北壁際に重複しており、ST 1がST 2を切っており、北壁には掘り方が認められた。ST 1には石組の炉跡(EL 6)が、ST 3にはカマド跡(EL 7)が付随し検出している。

土坑(SK 8)・溝跡(SD10)・不明遺構(SX 9・22・23)などは47～50—55～57G、住居跡の南東側に確認された。SK 8・SX 9・SD10は各々重複しており、SK 8がSD10を切り、SD10がSX 9の上部を切っている。

遺物の分布は、遺構の分布とほぼ同様で調査区北西側(46～50—56～59G)IV層で出土している。ただし、遺物の出土量は多いとはいえない。

わずかではあるが、縄文土器(晚期)がST 4上面(包含層)及び47—57G付近より出土している。EL 6内には土器(RP 1)が敷き詰めたように出土している。ST 3床面から完形の赤焼き土器(RP 5)、EL 7上部より刻み文字が認められる赤焼き土器(RP 4)が出土している。SK 8・SD10・SX 9・22・23からの遺物の出土は認められない。調査区南側のトレンチなどからは遺構・遺物の検出は認められなかった。

+ 53 - 59 G  
N

+ 53 - 57 G  
S

+ 53 - 54 G  
N

根



+ 51 - 50 G  
S

+ 51 - 50 G  
S

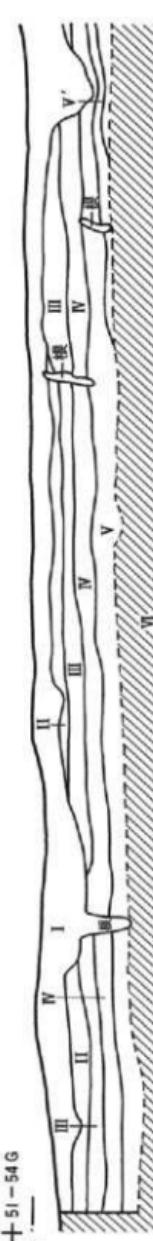
+ 51 - 54 G  
E

根



+ 51 - 50 G  
W

+ 51 - 50 G  
W

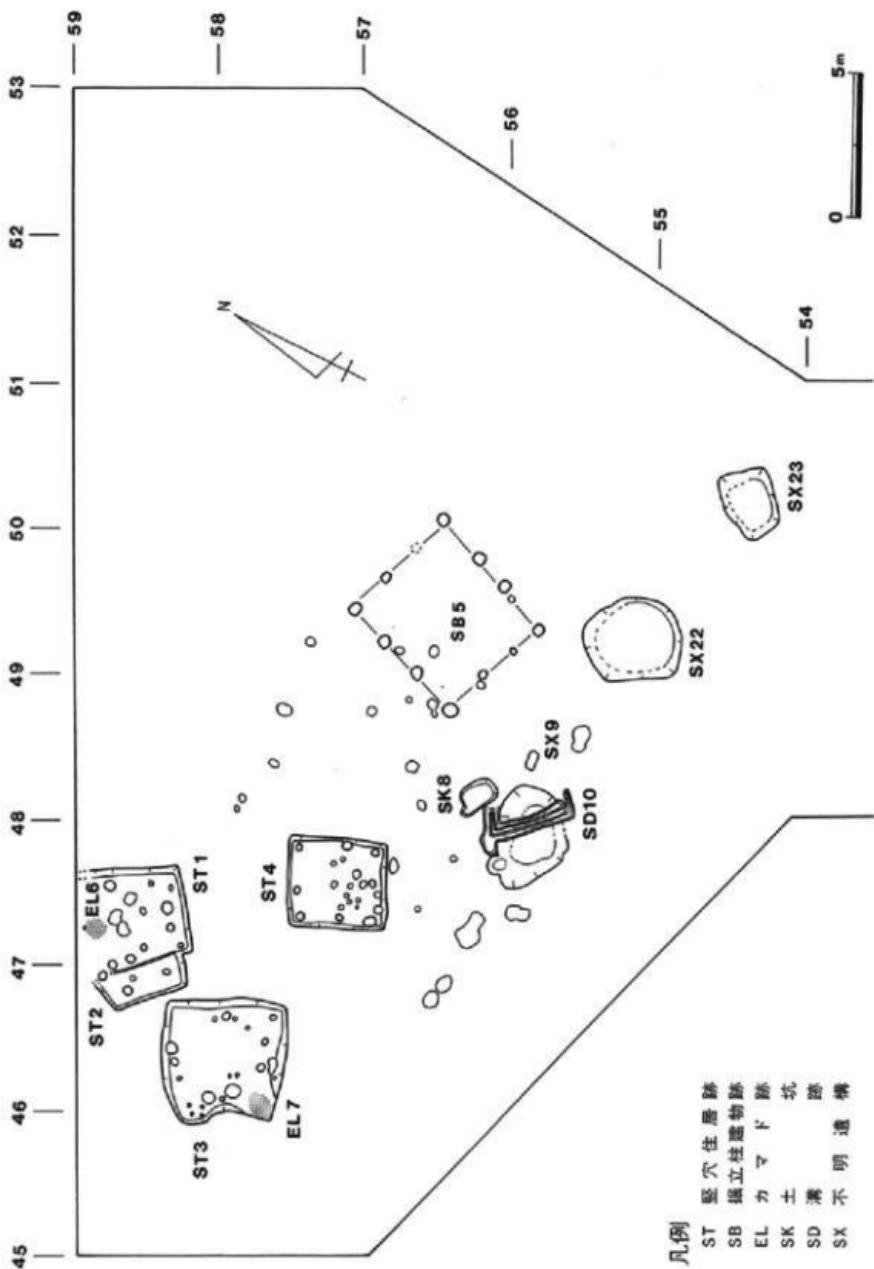


I. 灰褐色シルト (軟土)  
II. 黑褐色シルト  
III. 黑褐色シルト (粘性・炭化鉄を含みしまらない)  
IV. 黑褐色シルト (粘性・炭化鉄を含みしまるがある)  
V. 黄褐色シルト (IV層より若干硬い)  
VI. 別灰褐色細粒質土

3 m

第4図 調査区土層断面図

第5圖 遺構分布圖



### III 検出遺構

#### 1 建物跡

##### 1・2号住居跡(第6図 図版4・5・10)

調査区の北西側の緩傾斜地、47・48—59G内に在り標高257.20m前後に位置している。南側に3号住居跡と隣接し、南東側に4号住居跡が在る。確認面はIV層上面でV層をわずかに掘り込んで造られ、1・2号住居跡とも重複している。遺存状態は、覆土上層がナラの木の根によって攪乱される以外はほぼ良好である。

##### 1号住居跡

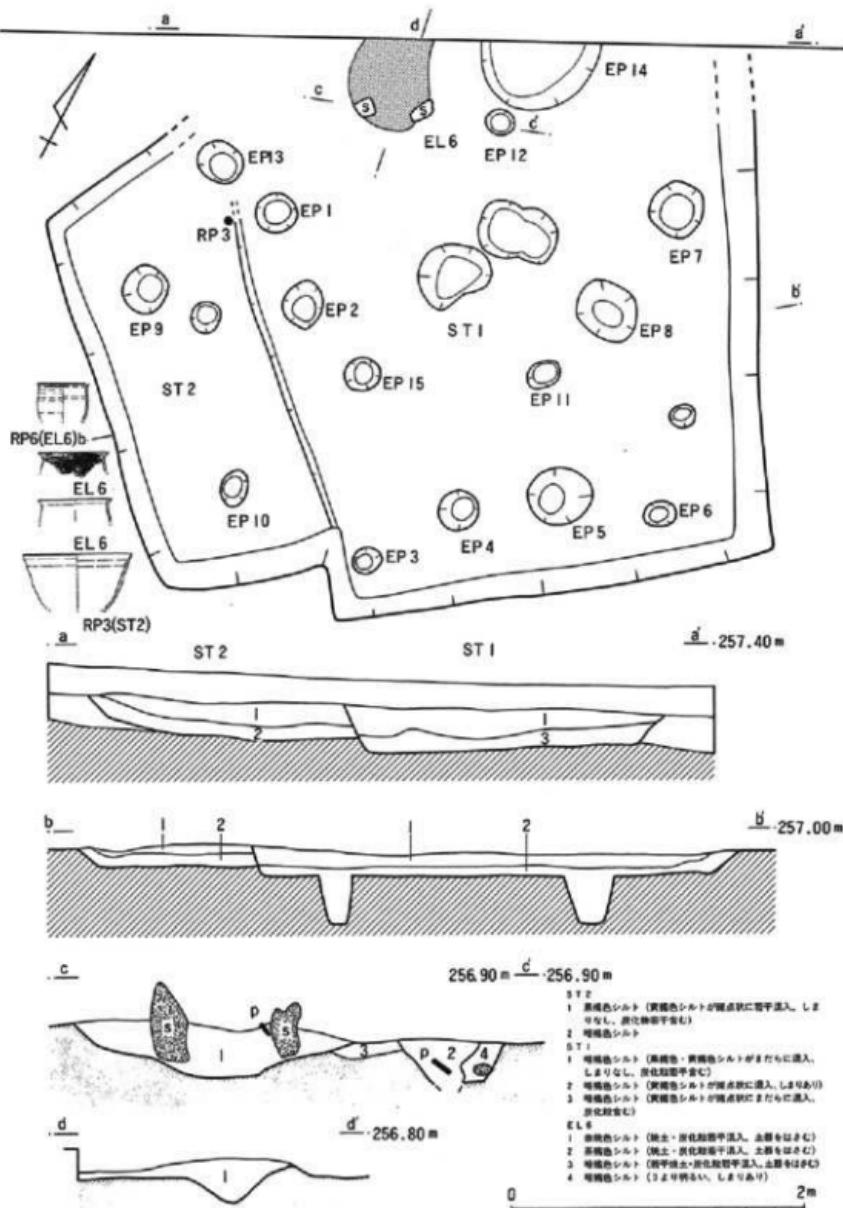
平面形は、北側が未掘で不明であるがほぼ南北に長軸をもち、西辺がやや西側に膨らむ不整の長方形を呈する。規模は、長軸推定4.20m・短軸3.48mで確認面からの深さは28~33cm、長軸方向N-33°-Wを測る。壁は、確認面から中位まではやや開くがほぼ垂直に掘り込まれ、他方は下部のみで検出したが西側で垂直、南側から東側は緩やかにそれぞれ掘り込み、全体として軟弱である。床面は全体に軟弱で概ね平坦であるが、カマド(EL 6)南側の周辺部はやや堅く踏みしめられている。柱穴は、12本検出され主柱穴2本と支柱穴10本である。EP 8・15で東西方向に対応し住居跡の中央南寄りに位置し、径25~40cmで深さ45cmとなり、ほぼ垂直に掘り込まれている。支柱穴EP 1~7は東・南・西辺壁寄りに位置し、西辺と東辺部ではやや間隔が広く配置し、南辺では壁に沿って配列している。径22~43cm・深さ26~32cmである。

カマド(EL 6)は、住居跡の北辺壁の西側寄りに在るが、木の根により攪乱が著しいため下部を検出したのみであり、北側先端部も未掘のため全体は不明である。規模は、長軸推定85cm・短軸64cmで長軸方向N-30°-Wを測る。焚口部は、偏平な自然状態の河原石2個を支柱に配し、焚口には焼土が厚く堆積している。EP14は、径82cm・深さ12~24cmで焼土粒や炭化物が混じり、RP 6などが出土することから貯蔵用の穴と考えられる。

覆土層は、大きく2層に分けられ、上層の1は暗褐色シルトで黒褐色・黄褐色粘土が斑点状に住居跡全体にみられ、下層2は薄くそれぞれにレンズ状に堆積する。出土遺物は、カマドおよび貯蔵穴周辺より出土している。

##### 2号住居跡

1号住居跡と重複しているため、西側3分の1を検出したのみで全体は不明である。平面形は、東側柱穴の配列からみると恐らく東西方向に長軸をとる不整の長方形を呈するとみられる。大きさは南北短軸方向3.04m・確認面からの深さは24~26cmである。壁は全体に緩やかに掘り込まれ、軟弱である。床面は、概ね平坦で軟弱である。柱穴は5本検出さ



第6図 1・2号住居跡(EL 6炉跡)

れ支柱穴となる。主柱穴は確認されない。径33~46cm・深さ25~32cmである。

覆土は2層に分けられ、1・2層とも黄褐色粘土ブロックが多量に混じり、恐らく1号住居跡の構築時に人為的に埋められたと考えられる。出土遺物はわずかで、RP 3が床面より浮いた状態で出土している。

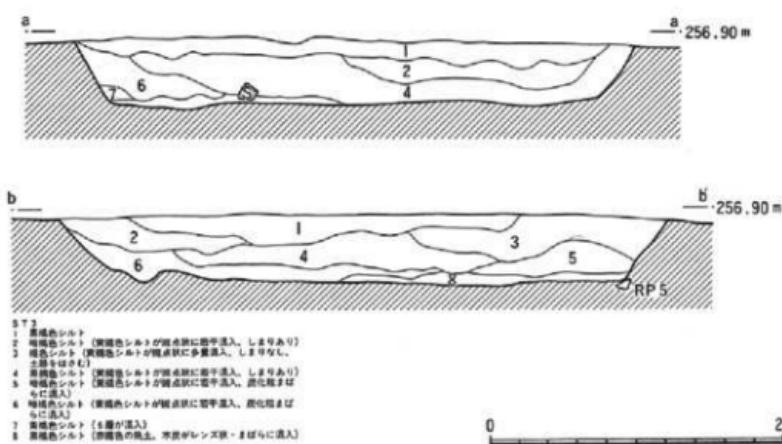
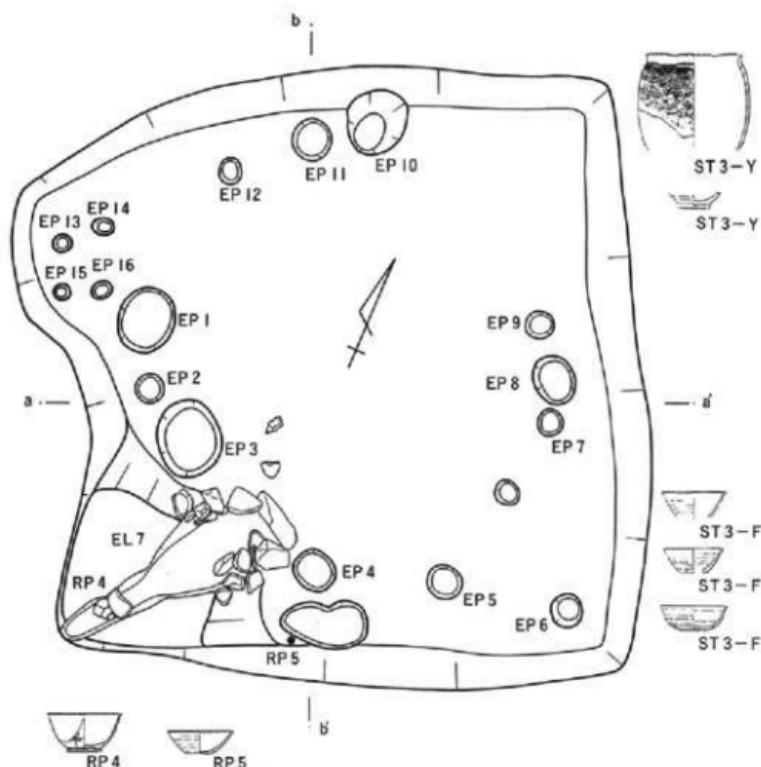
1・2号住居跡の新旧は、土層観察により1号住居跡が新しく2号住居跡が古い。時期は出土した土器により、両住居跡とも10世紀中頃から後半、平安時代の後半期の所産とみられる。

### 3号住居跡(第7・8図 図版6・7・10)

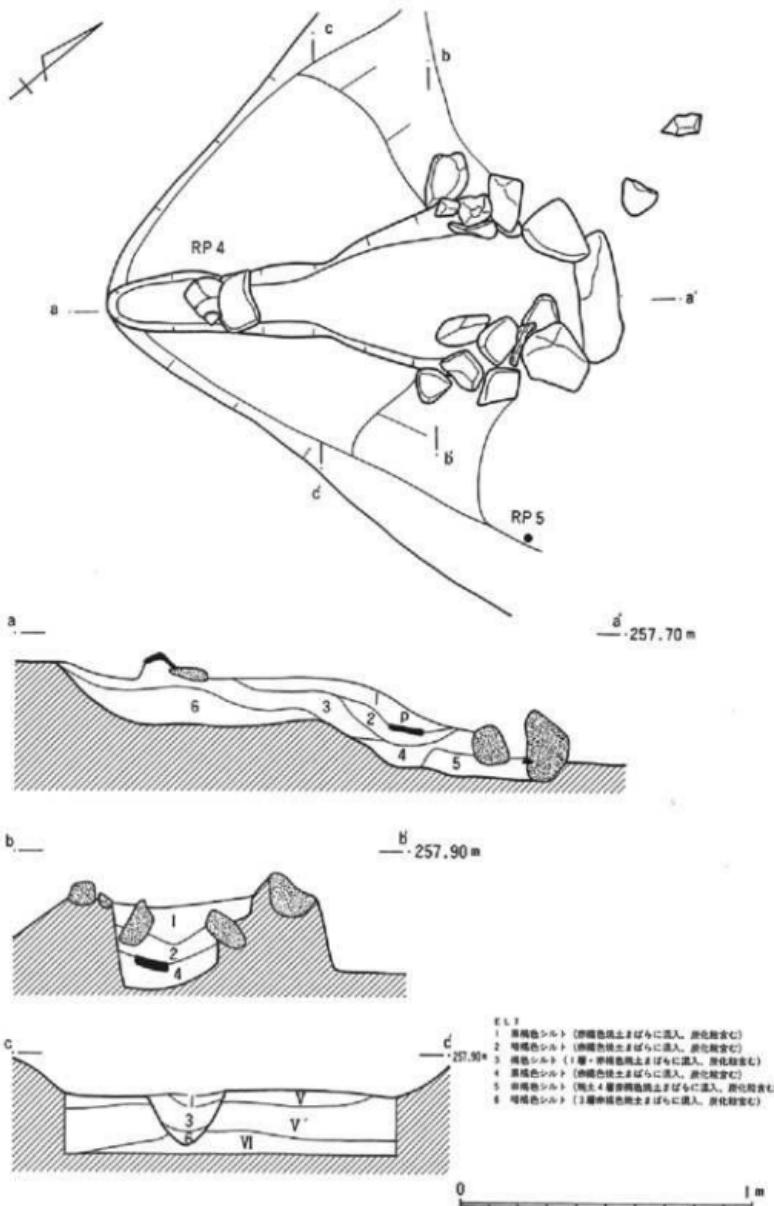
調査区の北西側の緩傾斜地、45・46-58・59G内に在り、標高256m前後に位置している。北側に1・2号住居跡と隣接している。確認面はIV層中でV層を掘り込んで造られている。遺存状態は、南東側住居跡の隅が木の根によって搅乱している外はほぼ良好である。

平面形は、北辺・東辺・南辺壁の中央部がやや膨らみ、北西隅が住居外側に突出し、ほぼ南北に長軸をもつ不整の長方形を呈する。規模は、長軸4.24m・短軸3.86mで確認面からの深さは39~50cm、長軸方向はN-22°-Wを測る。壁は、北辺壁で緩やかに掘り込まれている外はほぼ垂直になっている。壁の状態は、北辺から東辺と南辺の隅まで黒褐色土の壁で堅く叩きしめられ、西辺の壁はやや軟弱になっている。床面は、住居の北西隅から中央部とカマド(EL 7)付近にかけて、黒褐色粘土と黄褐色砂が混じり合って堅く踏みしめられ、凹凸が激しくやや盛り上がっている。壁際では、やや傾斜面になり、とくに北辺壁では住居跡の中央部に向けて緩やかに傾斜し、全体として軟弱である。また、床は住居中央から北側ではV層を5~10cm、中央部から南側にかけてはV層を15~25cm掘り込んでいる。北西側張り出し部は、住居跡の西側へ方形状に突出しEP13~15の小柱穴4本検出され、床面も軟弱で住居内側へ大きく傾斜し、径12~16cm・深さ16~22cmでほぼ垂直に掘り込んでいる。床面の状態や柱穴の配置からみて張り出し部は恐らく住居跡の出入口と推定される。柱穴は、張り出し部を除くと12本検出され、西辺側EP 1~3・東辺側EP 7~9・北辺側EP 10~12と、壁際寄りの中央部に位置し各3本対になり、中央が主柱穴で両脇は支柱穴となる。南辺側ではEP 4~6で壁に沿って90cmの間隔をもって直線的に配列される。柱穴の大きさは、EP 2・4~6・8・11で径21~28cm・深さ26~32cm、その外の柱穴は径22~43cm・深さ7~13cmと浅く掘り込んでいる。

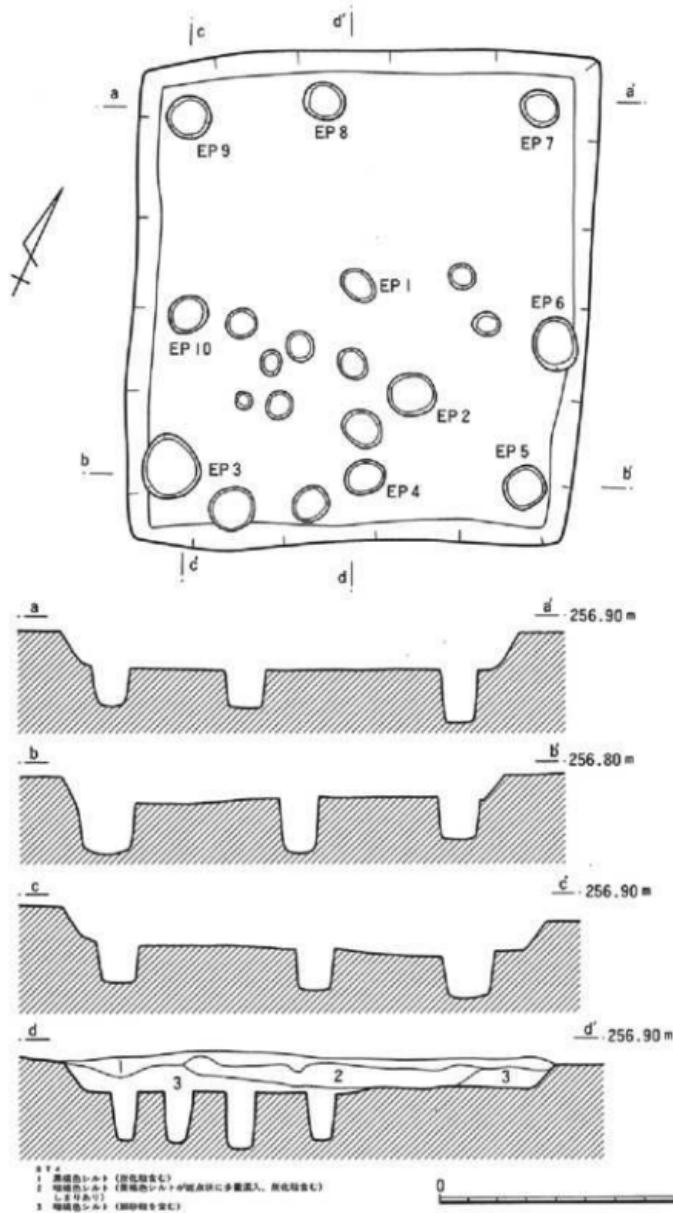
カマド跡(EL 7・第8図)は、住居跡の南西隅部の外側へ長く突出するように位置している。構築は、煙道部から焚口部にかけて住居跡壁などを切り出すように掘り込み、天井を若干の粘土で築き固めるように造られ、焚口部や袖部は粘土を使用せず自然の河原石を用



第7図 3号住居跡



第8図 7号カマド跡



第9図 4号住居跡

いて石畳炉的な配列で組んでおり、煙道部と焚口部で階段状の緩やかな掘り込みとなっている。焚口内側の底面は若干焼けている外は、河原石なども斜焼成を受けていない。河原石の配列は、袖部にあたる部分が石を直立するように、焚口部では石を横位に並べて配置している。規模は、長軸3.5m・最大幅1.24m・煙道幅42~51cmで、長軸方向N-31°-Eを測る。覆土の堆積状態は、大きく6層に分けられ、1・3層の上部に白色粘土ブロックが混じり、4・5層には焼土粒子や炭化粒子が含まれる。全体として西側から東側に流れ込むようにレンズ状に堆積する。

住居跡の覆土は、大きく8層に分けられ全体に黄褐色シルト粘土がブロック状あるいは斑点状に混じる。堆積の状態は、1~3層は北側から緩やかに堆積し、4~8層は北東側から急激に流れ込むよう堆積している。8層には木炭や灰などがやや厚くカマド周辺部に認められる。

出土遺物は、大半がカマド内や周辺地区から出土し、土師器の壺・須恵器の壺・赤焼土器の壺・高台壺等が出土している。RP 4は赤焼土器の高台壺でカマド煙道部の先端付近に礫とともに押しつぶされた状態で、RP 5はカマドの南辺壁際にやや傾くように正位の状態でそれぞれ出土する。

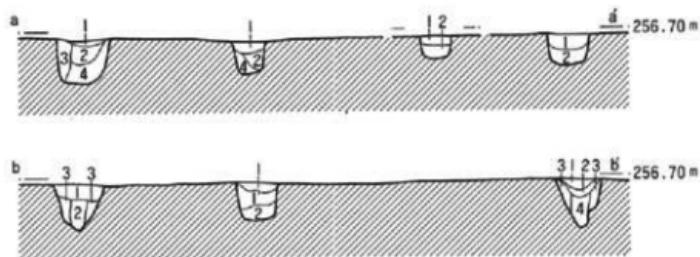
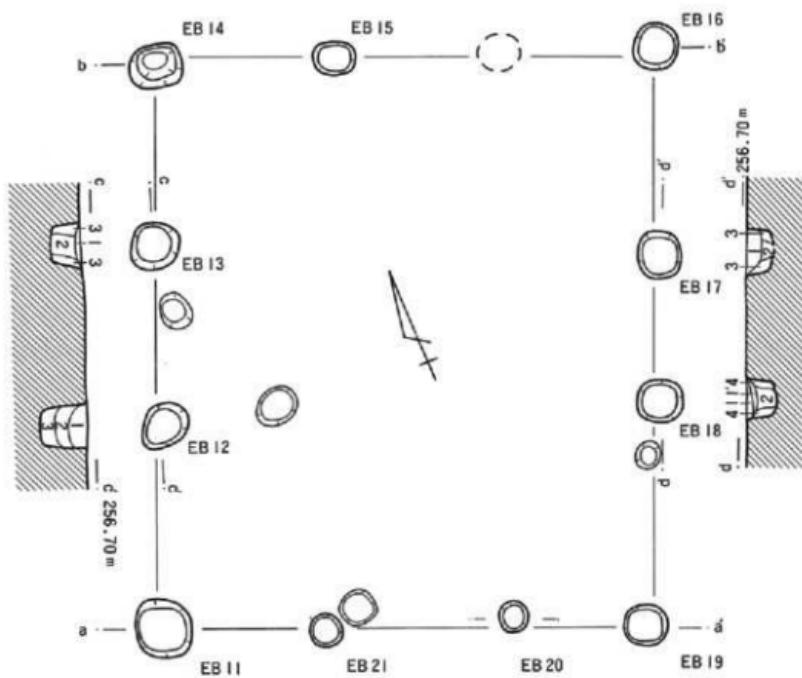
本住居跡の時期は、出土した土器からみて10世紀中頃から後半にかけての平安時代後半に比定される。

#### 4号住居跡(第9図 図版8・10)

調査区の北西側の緩傾斜地、47-57・58G内に在り、標高255.90m前後に位置している。西側で1~3号住居跡と南東側では8号土坑などとそれぞれ隣接している。確認面はIV層中位から下層にかけ検出され、IV層中を掘り込んで造られている。遺存状態は、覆土上層が木の根によって搅乱を受けている。

平面形は、各辺の中央部がやや膨らみを有し、南北が長軸をとる長方形を呈している。規模は、長軸3.42m・短軸3.09mで確認面からの深さは19~25cmで、長軸方向N-25°-Wを測る。壁は全体に緩やかに掘り込まれ軟弱である。床面は、ほぼ平坦であるが南西壁隅が若干傾斜しており、北辺側がやや堅く踏みしめられているほかは軟弱である。柱穴は10本検出されEP 1~10で、配置はEP 1が住居跡の中央に主柱穴として在り、EP 3・5・7・9では住居跡の隅部に、EP 4・6・8は住居各辺の壁際の中央寄りに位置し、2間×2間の間尺となる。柱穴の大きさは、径28~43cm・深さ29~41cmである。覆土は3層に区分され北西から流れ込むよう堆積する。出土遺物は覆土上面からわずかに出土する。

時期は、恐らく10世紀中頃から後半の平安時代後半に比定される。



- S B 5
- 1 噴褐色シルト（褐色シルト若干混入）
  - 1' 褐色シルト
  - 2 黒褐色シルト（1層がまだらに混入）
  - 3 噴褐色シルト（褐色シルト若干混入）
  - 4 黑褐色シルト（深10cmを数個はさむ）

0 2m

第10図 5号掘立柱跡

### 5号掘立柱跡(第10図 図版9・10)

調査区の中央部の平坦地、48~50-56~58G内に在り、標高256.60m前後に位置、やや南北棟に長軸をもつ掘立柱建物跡である。桁行3間×梁行3間の規模になり、大きさは南北4.20m・東西3.65mでN-20°-Eを測る。柱の距離は東西で1~1.2m、南北では1.2mの等間隔である。北辺の一部では柱が確認されない。掘方は15cm掘り下げた際、EB11-13-14-16~18・19が明瞭に判別される。柱穴内の覆土は3層に区分される。柱穴の大きさは、径20~40cm・深さ17~23cmである。掘り込みはほぼ垂直になる。遺物の出土は僅かである。

時期は、住居跡の検出状況や配置関係から10世紀中頃から後半、平安時代の所産と考えられる。

## 2 土坑

### 8号土坑(第11図 図版10)

調査区の西側の平坦地、48-57G内にあり標高256.65m前後に位置する。10号溝と重複し南側で9号不明遺構に接する。確認面はIV層下部である。

平面形は、やや膨らみのある不整の隅丸方形を呈し、長軸がほぼ東西に延る。大きさは、長軸1.29m・短軸90cmで深は31~35cm、長軸方向N-58°-Wを測る。壁は西側でほぼ垂直になる他は緩やかに掘り込まれている。底面は、壁際で傾斜が強く概ね平坦で軟弱となっており、断面形がほぼタライ形を示している。覆土層は明確に区分ができず、暗褐色シルトで若干の炭化粒子が混じる。遺物の出土は認められない。

新旧関係は、10号溝跡が新しく8号土坑が旧い。時期は覆土の状況から判断すると、恐らく平安時代の後半と考えられ、性格・内容は不明確である。

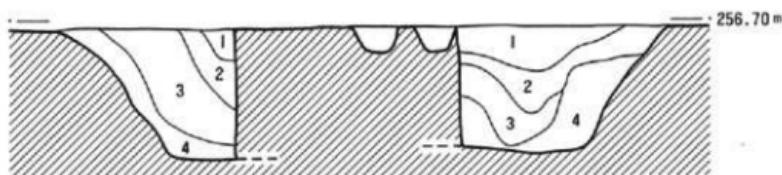
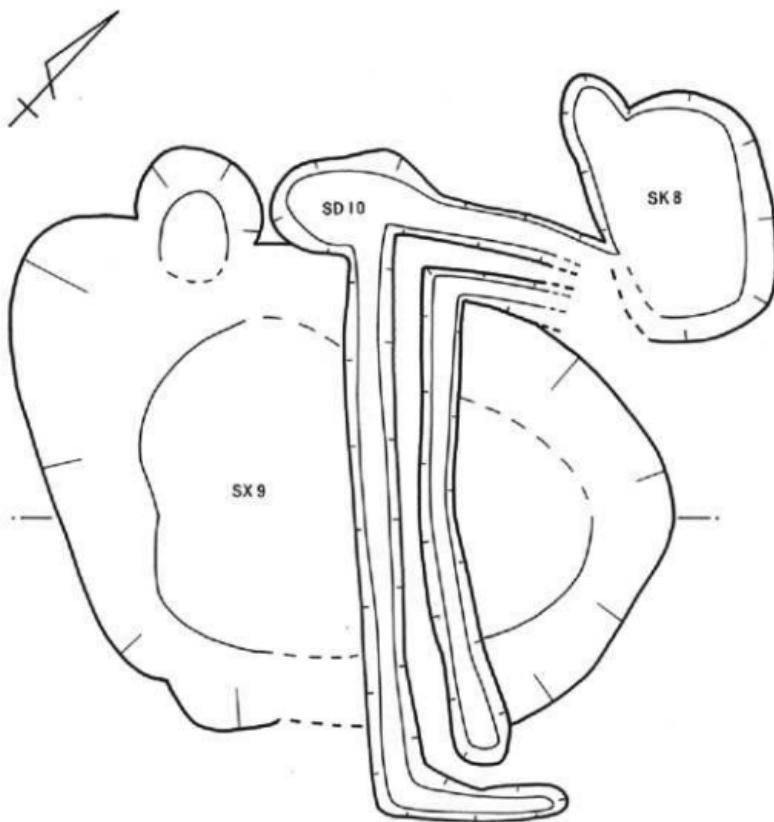
## 3 溝 跡

### 10号溝跡(第11図 図版10)

47-48-56-57G内に検出され、標高256.60mに位置する。溝跡は北側から延びはじめコ字状に屈曲し南側で止まっている。溝の幅22~30cm・深さ12~14cmで東西方向N-56°-Wを測る。覆土は黒色シルトで一層である。遺物の出土は認められない。時期は覆土層からみて平安時代以降の時代と考えられる。

## 4 不明遺構

3基検出され、調査区の南側に位置する。覆土の中央部に黒色粘土・黄褐色粘土が多量に混じり、確認した平面形が黒色土と黄褐色土がドーナツ状に堆積し、性格は不明である。



- S X 9
- 1 黒褐色シルト（黄褐色シルト混入）
  - 2 黒色シルト粘質土
  - 3 黒灰色シルト
  - 4 黒色シルト

0 1m

第III図 8号土坑・10号溝跡・9号不明遺構  
-17-

## IV 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして5箱である。そのほとんどが土器(縄文土器・土師器・須恵器・赤焼土器)である。少量ではあるがフレーク片・砥石などがある。これらの土器の半数以上は遺構内から出土している。包含層より出土した縄文土器(中・晩期)を除けば、遺構内遺物の大半は平安時代の所産と考えられる。図示した各土器の概要については表にまとめ、ここでは各種別について概述する。

### 1 縄文時代(第12図1 図版11)

縄文時代の遺物は、中期土器片(大木8b式)と晩期の半完成土器、石器剝片数点が出土するのみで量的には僅かである。

第2図(1)は、ST4東辺壁の中央部上層の47-57G IV層中からまとまって検出される。器形は口縁部が短頸で外反し、胴中半部に最大の膨らみを有し全体的に湾曲し、胴下半から底部は欠損する。口唇部には指頭による刻目が施され緩やかな小波状となり、頸部は丁寧に研磨調整され、棒状工具の背面で押圧するように一条の沈線で文様帯を区画する。地文は縄文で、胴部全体に斜状方向でLRの付加縄文を施文する。内面は良く研磨されている。胎土は石英粒や砂粒も混ざるが焼成も良く焼締まっている。色調は全体に茶褐色を呈し、胴上半部に5~6cm幅で橢円形状に4単位の黒色斑点が認められる。計測値は口径26.5cm・胴部最大径30.8cm・現存高25cm・器厚0.7~1cmである。時期は、縄文時代晩期大洞A'式に相当するとみられる。

### 2 平安時代(第12~14図 図版11~13)

土師器、壺(7~10)は、外面をナデ、内面はミガキ及び黒色処理を施している。内黒で平底、口径15.4cmに比して4.2cmと器高が低い(9)。口縁部は欠損しているものの内面に漆紙が付着しているもの(8)がある。

土師器、壺(6)は1点のみの出土である。外面ナデ及び底部にケズリを施しており、底部はヘラ調整である。現存値、口径13.8cm・器高3cmであるが完形でも口径・器高はほぼ同様と推定される。

土師器、壺(2~5)器内外面に器面調整によるハケ目が施されている。ただし、(2・4)の外面は摩滅が著しい。(2)の内面では、幅1.5cm・長さ6cm前後の縦方向のハケ目調整が施されている。(3)は、幅1.2cm・長さ5cm前後の縦・斜方向の丁寧なハケ目調整が施されている。(4)は摩滅が著しいが、幅2cm前後・長さ8cm以上の斜方向のハケ目調整が施されている。

須恵器、壺(11)体部破片資料であり大きさなどは不明であるが、短頸の壺である。外面

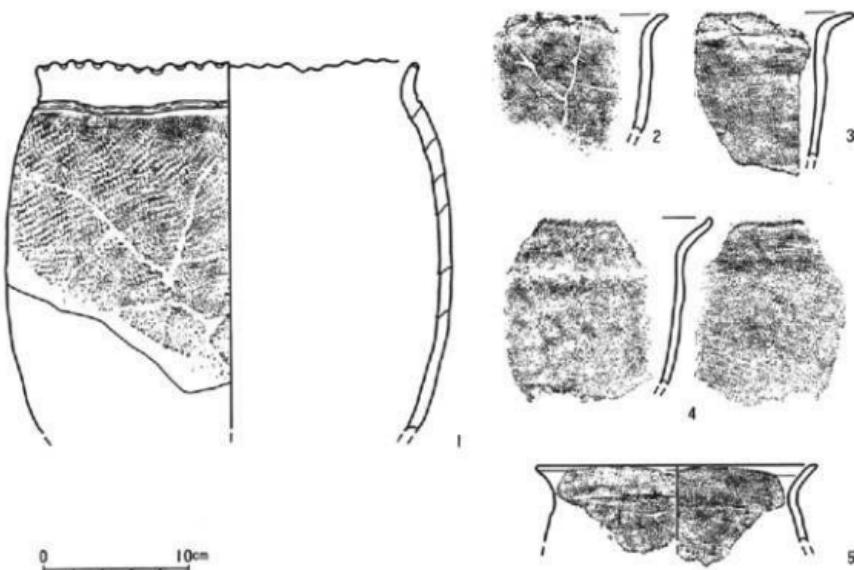
は条線のタタキ・内面は同心円アテである。

須恵器、甕(12~14)、(12)は肩部破片資料、短頸の甕である。外面は条線のタタキに横方向のハケ目、若干の自然釉がみられる。(13)外面はタタキ内面に横方向のハケ目、自然釉がみられる。(14)外面は格子状のタタキ、内面は横・斜方向のアテである。

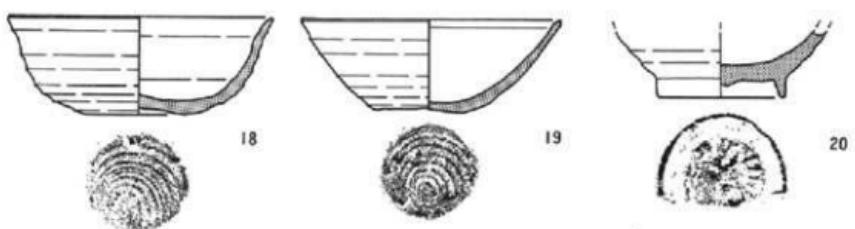
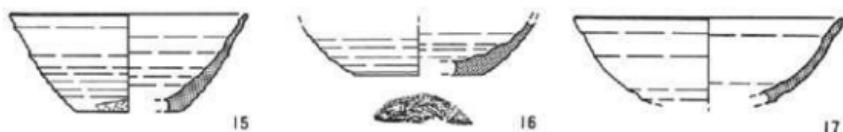
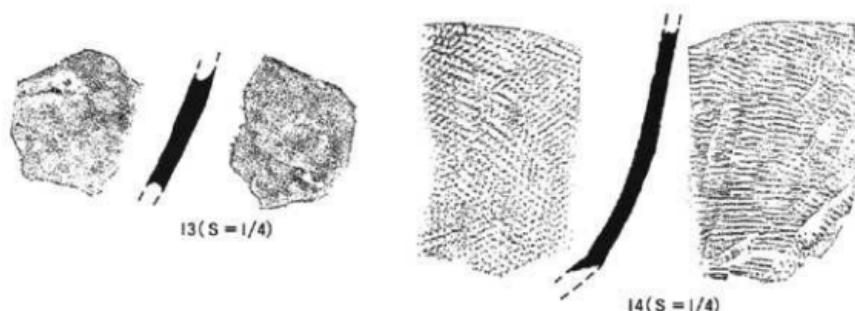
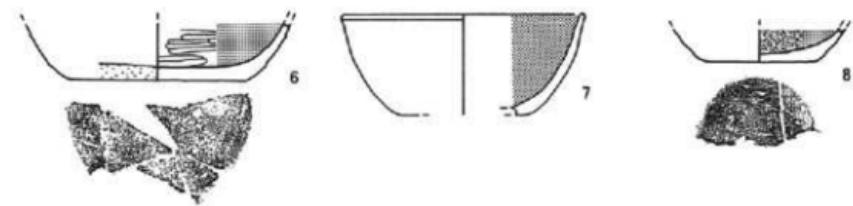
赤焼土器、壺(15~19)。ロクロ成形によるもので、体部がほぼ直線的に立ち上がる器形を呈する。底部は回転糸切り離し無調整である(16~19)。(15)の底辺部にはケズリが認められる。(20~21)は高台付で、底部は工具調整がある。(21)は壺の割合に法量が大きく、内面に黒色処理を施している。体部外面に刻字(佛?)がある。

赤焼土器、甕(22~25)、(22~23~25)は器上半部である。(22)は小ぶりの甕、口縁部が若干外反し、頸部に縦方向のナデ、内面には煤の付着が認められる。器高は完形でも7~8cmと推定される。(23)は内外面にロクロ痕を明瞭に残し、器厚が5mm以内と薄い。(24)は底辺部のみである。外面は摩滅が著しいが、斜状方向のヘラケズリが施されている。

赤焼土器、(26)鍋底部、外面ナデ、内面ハケ目調整がある。(27)鍋口縁部のみである。器内外面ともにナデ調整が見られる。(28)鍋である。外面は、口縁部横・体部斜方向のヘラケズリ、内面には2.5cm前後のハケ目が調整されている。

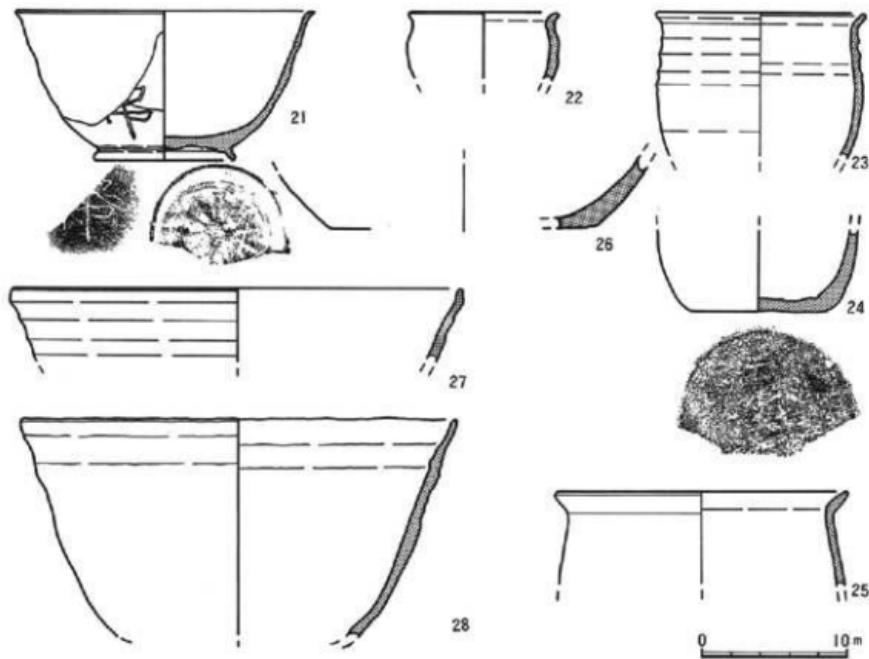


第12図 出出土器(1)



0 10cm

第13図 出土土器(2)



第14図 出土土器(3)

遺物観察表

擇 固 番号	遺物 番号	器種	計測値(m/m)		色調	胎土	焼成	底部切離	調整技法		備考	出土地点 層位	
			口径	底径					外面	内面			
第12回	2	土器	甕	(80)	灰黄褐	粗砂混	良		手彫り目	ハケ目		ST 3-Y	
	3		甕	(100)	茶褐	粗砂混	良		ハケ目	ハケ目		EL 6(ST 1)	
	4		甕	(115)	赤褐	粗砂混	良		ケズリ	ハケ目		EL 7-F	
	5		甕	(192)	(52)	茶褐	粗砂混	良	ハケ目	ハケ目		EL 6(ST 1)	
	6		皿	(138)	(91)	(30)	暗灰	粗砂混	良	ヘラ調整	音部タテ	手彫り目	48-59H
	7		坏	(122)	(56)	(52)	棕	鐵	密	回転糸切り	ナダ	手彫り目	RP 2 EL 6(ST 1)
	8		坏	56	(22)	にぶい	鐵	密	良	回転糸切り	ナダ	手彫り目	内側漆付層 ST 3-F
	9		坏	(154)	(42)	浅黃褐	粗砂混	良		ナダ	手彫り目		48-59H
	10		坏	(132)	(53)	棕	鐵	密	良	ナダ	手彫り目		ST 3-F
	11		甕		灰	粗砂混	堅		タタキ	アテ	自然釉有	47-59H	
第13回	12	須恵器	甕		灰	粗砂混	堅		タタキ	アテ	自然釉有	ST 3-Y	
	13		甕		灰黒	粗砂混	不規		タタキ	ヘラ	自然釉有	ST 3-F	
	14		甕		灰白	鐵	密	堅	タタキ	アテ		EL 7-F	
	15		坏	(122)	(54)	(51)	赤褐	粗砂混	良	手彫り目	ナダ		ST 3-F
	16		坏		(57)	(25)	灰白	粗砂混	不良	回転糸切り	ナダ	ナダ	EL 7-F
	17		坏	(140)		(44)	赤褐	粗砂混	良		ナダ	ナダ	X-O
	18		坏	(137)	50	54	赤褐	粗砂混	良	回転糸切り	ナダ	ナダ	ST 3-F
	19		坏	146	46	48	茶褐	粗砂混	良	回転糸切り	手彫り目	ナダ	RP 5(ST 3-F)
	20		高台坏		66	(33)	赤褐	粗砂混	良	工具調整	ナダ	ナダ	ST 3-Y
	21		高台坏	(205)	(98)	(103)	赤褐	粗砂混	良	工具調整	ナダ	手彫り目	RP 4(EL 7)
第14回	22	赤褐土器	甕	(515)	(45.5)	赤褐	粗砂混	良	手彫り目	ハケ目	内面スス面	X-O	
	23		甕	(144)	(99)	棕	粗砂混	良	ナダ	ナダ		RP 6(EL 6)	
	24		甕	(86)	(55)	赤褐	粗砂混	良	ケズリ	ハケ目	内面スス面	ST 3-F	
	25		甕	(202)	(63)	赤褐	粗砂混	良	ケズリ	ハケ目		EL 7F(ST 3)	
	26		網		(96)	(47)	赤褐	粗砂混	良	ナダ	手彫り目		47-57H
	27		網	(306)	(50)	赤褐	粗砂混	良	ナダ	手彫り目		47-59H	
	28		網	(300)	(148)	赤褐	粗砂混	良	ケズリ	手彫り目		RP 3(ST 2)	

## V まとめ

今回の調査は平成2年度、山形県米沢ヘリポート整備事業に伴う横山C遺跡の緊急発掘調査成果をまとめたものである。

現地調査は、平成2年9月17日～同年10月31日まで延べ31日間にわたって実施した。遺跡の所在地は、山形県米沢市大字竹井字横山2531番地他に位置し、標高257～258mを測る。調査面積1,125m<sup>2</sup>である。

遺構及び遺物の検出は、調査区北西側(45～50—54～59G)付近に集中している。調査区は横山C遺跡の集落南辺部に位置するものと推定される。

建物跡は5棟検出された。竪穴住居跡(ST 1～4)4棟、うち炉跡(EL 6・ST 1内)、カマド跡(EL 7・ST 3内)の2基が検出された。掘立柱跡(SB 1)1棟は東西3間・南北3間である。竪穴住居跡は一辺の長さが各々3～4m、掘立柱跡は東西3.65m・南北4.20mの規模をもつ。

土坑は数基確認されているが、遺物が出土していないため、時期、性格、内容などは不明である。

溝跡は土坑と重複して検出された。土坑上部を切っており当遺跡でも新しい範疇に属すると推定される。

出土遺物には、縄文土器、土師器・須恵器・赤焼土器(平安)などがあり、縄文土器は流れ込みと考えられる。

従って時期は、10世紀中頃から後半、平安時代後半期の所産と考えられる。

図 版



遺跡遠景(南より)



遺跡近景(東より)

図版 2



遺跡近景(南より)



遺構検出状況(西より)

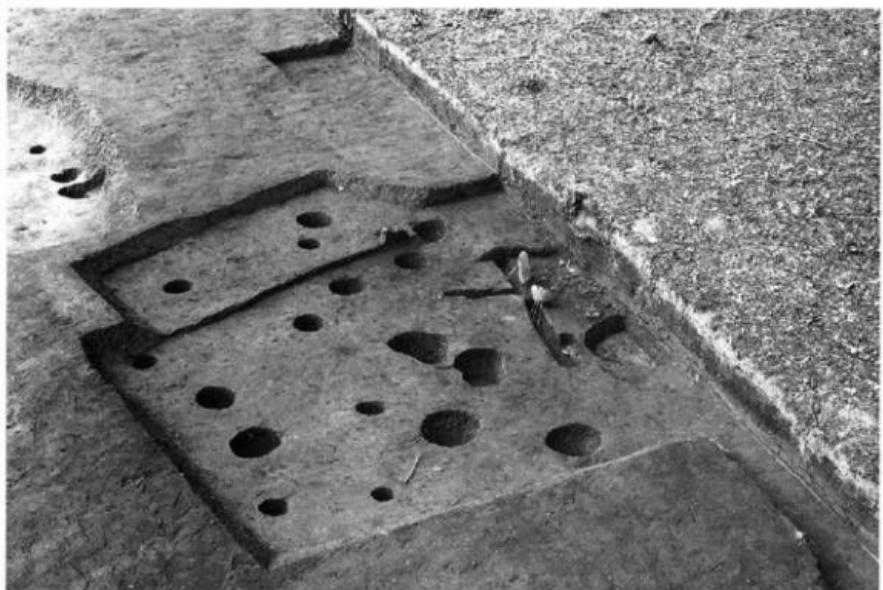


遺構検出状況(東より)

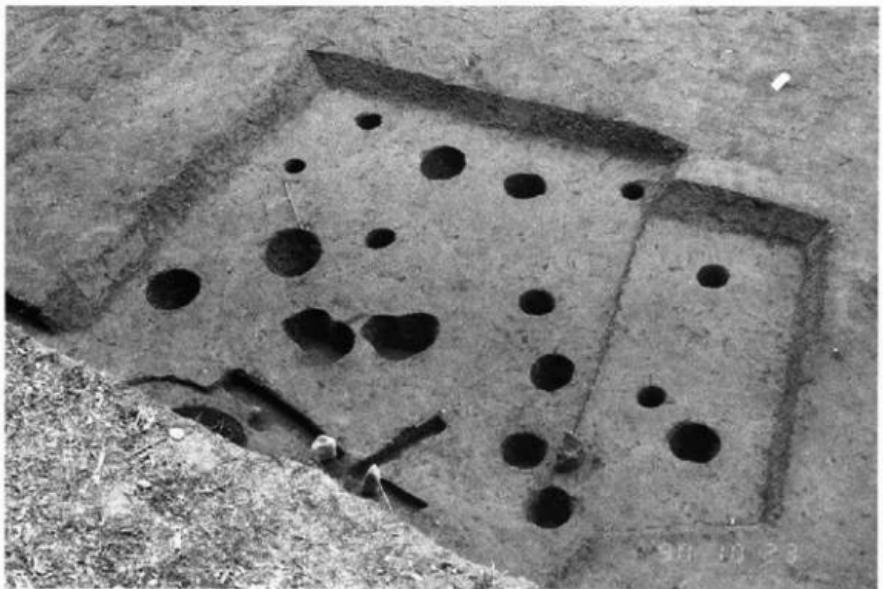


遺構群完掘状況(東より)

図版 4



ST I・2 竪穴住居跡(東より)



ST I・2 竪穴住居跡(北西より)



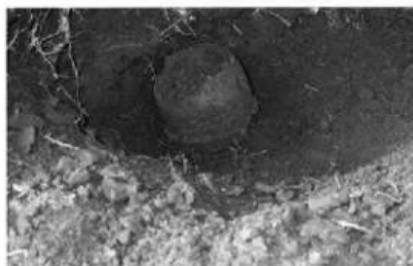
EL 6 炉跡(南より)



RP 1・2 遺物出土状況(南西より)



EL 6・RP 3 (南西より)



RP 6 遺物出土状況(南より)



RP 3 遺物出土状況(西より)



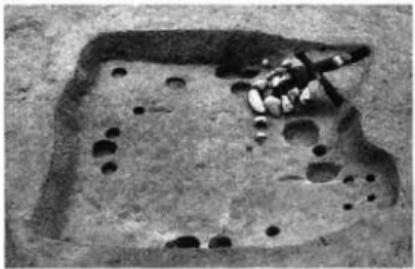
ST 3 壁穴住居跡(南より)



ST 3 完掘状況(東より)



ST 3 竪穴住居跡(南より)



ST 3 完掘状況(北より)



EL 7 カマド検出状況(南東より)



EL 7 カマド検出状況(北より)



EL 7 完掘状況(西より)



EL 7、RP 4・5 遺物出土状況(北より)



EL 7 土層断面(北東より)

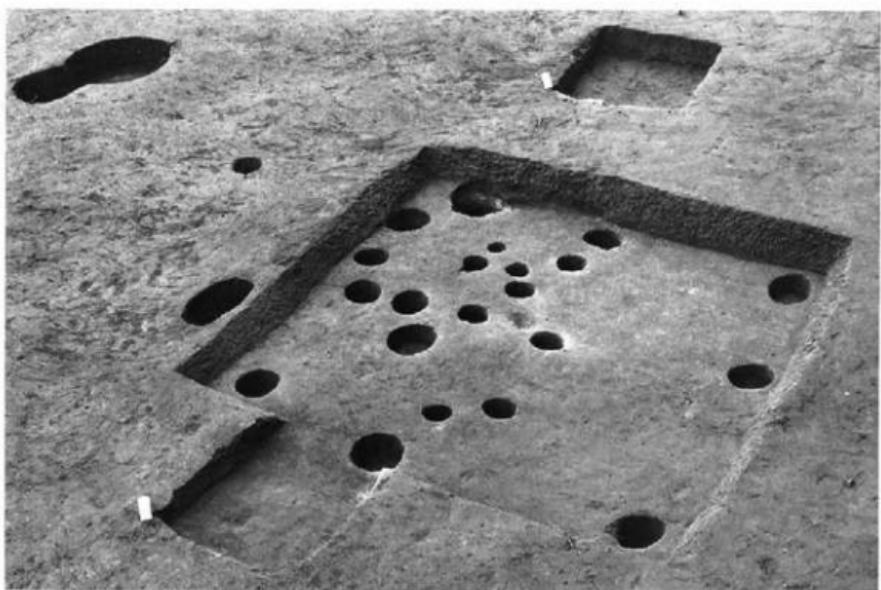


EL 7 土層断面(北東より)

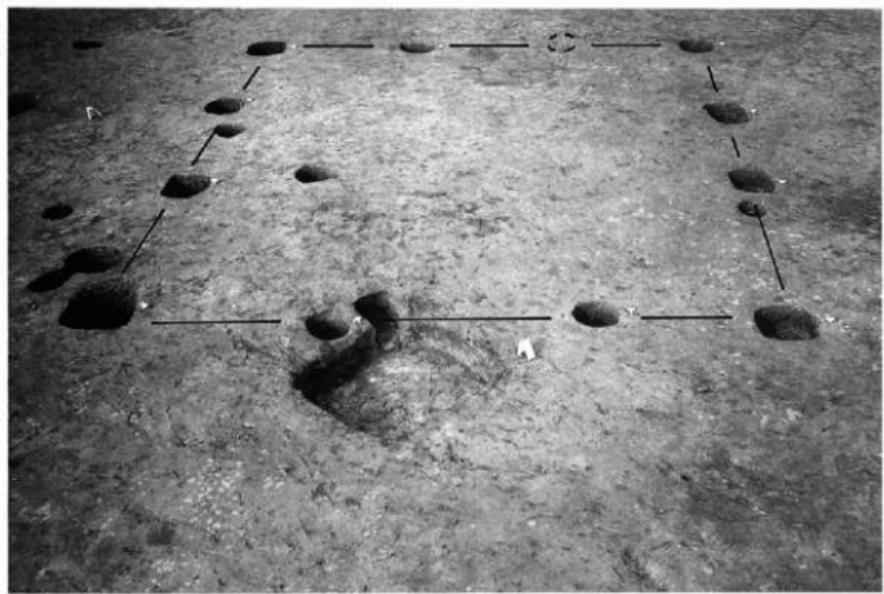
図版 8



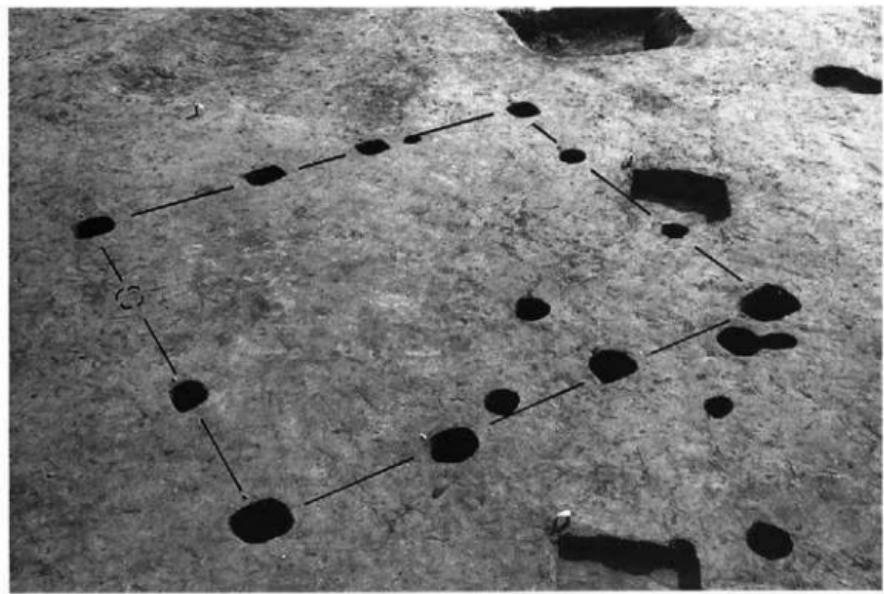
ST 4 竪穴住居跡(南より)



ST 4 完掘状況(東より)



SB 5 埠立柱建物跡(南より)



SB 5 埠立柱建物跡(西より)

図版10



ST 1～4 住居跡(南より)



ST 1～4 住居跡(北より)



SB 5 建物跡付近(南より)



SB 5 完壠状況(東より)



SK 8・SX 9・SD 10(南より)



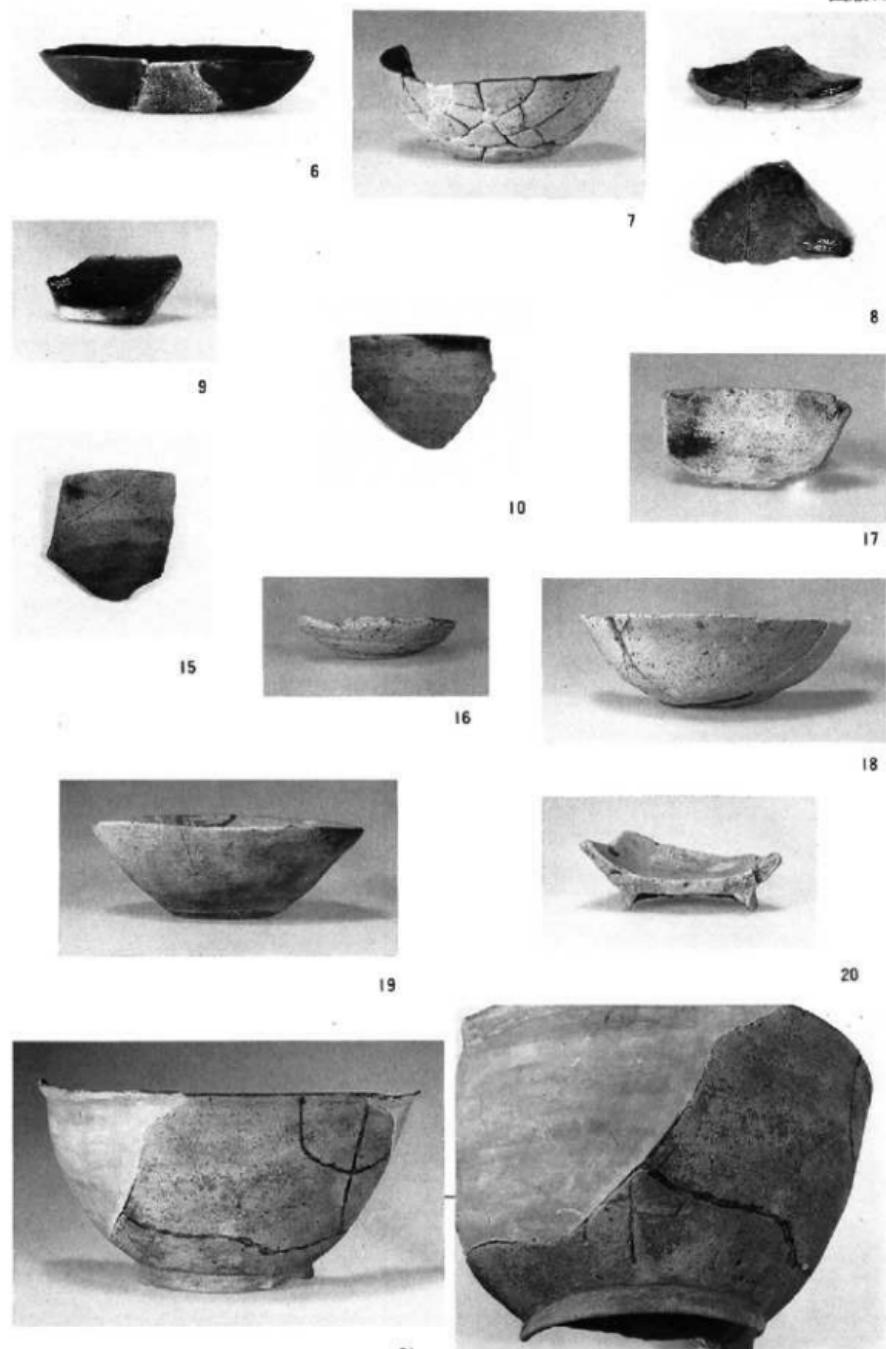
SK 8・SX 9・SD 10(北より)

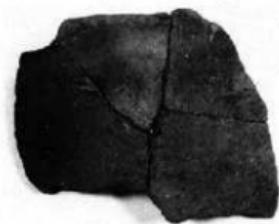


土層断面(東より)



51-54~51-50 G 土層断面(西より)





2



4



3



5



12



11



13



14

出土土器(2)



22



25



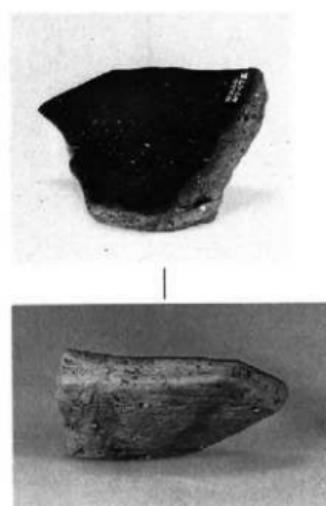
24



23



27



26



28

出土土器(3)



調査風景(南より)



調査風景(北より)



調査風景(東より)



鍵入式(東より)



調査説明会(南より)

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第168集

よこ やま  
横山C遺跡  
発掘調査報告書

平成3年3月30日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 山形印刷株式会社

---